

〈論文〉

アダム・スミスの学問論

田中 秀夫

要旨 アダム・スミスは『道徳感情論』でも『国富論』でも学問論を説いている。遺稿集『哲学論文集』の「天文学史」も哲学史であり学問史でもある。『エディンバラ評論』の「同人への手紙」もヨーロッパの学問論である。このようにスミスの著作の多くの部分で学問が論じられているが、そこには一貫して、好奇心に導かれた人間本性の知的関心に注目し、自由な学問へ精励と競争心を重視するスミスの思想が存在している。それはより良き明日を展望する志向によるもので、自由競争は経済の原理であるだけでなく、人間社会の諸次元に貫かれるべき原理とされている。

キーワード 学問論, 自由競争, 精励, 勤勉, 腐敗, 国民教育, 古代の哲学, 結合原理, 近代の哲学, 学問の墮落

はじめに

アダム・スミス (1723-90) はその時代において異数の蔵書家であった。集書の範囲も広く、ギリシア・ローマの古典文献から近代の様々なジャンルの文献にまでわたっている。そのことは水田洋編のスミス蔵書目録¹⁾を見れば一目瞭然である。スミスはスコットランド啓蒙を代表する思想家であるが、ヨーロッパ啓蒙を代表する思想家でもあり、文芸共和国のひと (man of letter) でもあった。文芸共和国は国境を超えたコスモポリスであるから、スミスはコスモポリタンでもあった。

一回り先輩のデイヴィッド・ヒューム (1711-76) もなかなかの蔵書家であったらしいが、彼の蔵書は散佚している²⁾。ヒュームやスミスの庇護者でもあった第3代アーガイル公爵 (Archibald Campbell, Earl of Ilay) の蔵書はさらに大規模であったらしい。インヴェラリーの蔵書は、19世紀に火災にあって再建されたから、往年のものに比すべくもないだろう。オックスフォード時代のスミスは、公爵のアダベリー (オックスフォード近在) の別宅の蔵書で学ん

だらしい³⁾。スコットランドの愛国者として知られるアンドルー・フレッチャーの蔵書も相当充実したものであったことが分かっている⁴⁾。

ヒュームも、スミスの弟子のミラーも、さらにD・ステュアートも学問論を展開している⁵⁾。鋭さではヒュームの学問論が出色であるが、スミスの分析も啓発性があり、しかも彼らに比べてスミスの学問論は遥かに詳細で包括的である。そして見方次第では、スミスの仕事の多くは学問論であった。

18世紀の啓蒙の時代には、ますます出版が盛んになった。印刷術の普及はカトリック教会による知と精神の独占あるいは寡頭支配を解体し、知的自由を広めることになった。そうすると当然、学問水準が向上する。ルネサンスと印刷術は宗教改革の動乱、宗教戦争を貫いて人文主義を広め、やがて啓蒙の時代を開くことになる。したがって、絶対主義的アンシャン・レジームはどこでも危機に直面するにいたる。権力者の専制政治と市民の自由への渴望が衝突する。危機は権力争いを引き起こす。こうなると開明派の権力者が勝利するか否かが、しばしば自由主義的変革の推進にとって決定的な要因ともなる。この点でスコットランドはイングランドと同じく幸運であった。

18世紀にオランダに倣って専門教授制度を導入したスコットランドの5大学は発展期を迎えていた。長く貧困に喘いできたスコットランドは、合邦(1707)の恩恵もあれば、アメリカ貿易のもたらす利益もあったし、またその後の改良運動(Improvement)、とりわけ最後のジャコバイトの乱(1745)以後の急速な経済発展が目覚ましく、その結果として次第に民富が蓄積され、そうした富裕化を基盤として繁栄を迎えていた。さらにまた第三代アーガイル公爵のような開明的な為政者にも恵まれた。アーガイル公爵の恩顧が、若い知識人にとって、いかに大きな支援となったかは、エマソンの研究⁶⁾で明らかになったが、スミスの学問論で触れられていないのは、貴顕の恩顧である。

富裕と自由は相関的だから、イングランド流の自由主義がさらに有力な潮流になってきた。1740年代以降の、スコットランド教会のなかの穏健派(Moderates)の登場は、富裕化の副産物という側面があるだろう。こうしてささやかな民富を基礎にスコットランドは人材育成に力を注ぐことになる。その人材育成は18世紀に、オックス・ブリッジを後目に、スコットランドの大学に名声をもたらしたし、19世紀にはヴィクトリア朝の繁栄に貢献するであろう。

グラスゴー大学は1727年に道徳哲学講座を創設したが、初代教授に就任したのはガーショム・カーマイケルであった。彼はプーフENDORFの『自然法に基づく人間と市民の義務』(1673)⁷⁾を教科書として用いた。世俗化と文明化が進んだこの時代の人材育成の手段として、包括的な自然法思想は道徳哲学の講義に適していた。第2代教授はフランシス・ハチスンである。アイルランド出身の長老派牧師でもあったハチスンは、ロック流の自然法と共和主義を総合する立場から道徳哲学を講義した。ハチスンは英語で講義をした嚆矢だったとされている。グラスゴー大学はアイルランドからもイングランドからも学生を引き付ける。エディンバラにはアメリカからベンジャミン・ラッシュをはじめとして多くの医学生が押し寄せた。やがてエディンバラ

は、ヒュームの甥のジョン・ヒュームが刑法の教授となって、法学でも名声を博するようになる。グラスゴー大学とエディンバラ大学は名声を求めて一部は競い合っていたように思われる。

グラスゴー大学とオックスフォード大学⁸⁾で学んだスミスは、法曹のケイムズ卿と議員のギルバート・エリオットの恩顧を受けて行ったエディンバラでの公開講義によって、その優れた能力を評価され、1751年に母校グラスゴー大学の論理学講座教授に迎えらる。第3代の道徳哲学教授のクレイギーは病弱で、保養地リスボンで療養した——そのリスボンではモンテスキューが他界した1755年に大地震が起り、数万人が犠牲となる——が、ほとんど講義もせずして他界した。スミスは1752年に空席となった道徳哲学講座に転じたが、いまだ29歳であった。スミスは36歳になった1759年には最初の著書『道徳感情論』を出版した。スミスの説いた同感の哲学は、ケイムズやリードのようなコモン・センス派の反発も招いたが、時代精神に合致したこともあって、出版は成功し、内外で評判となった。フランス語訳もやがて出た。

1764年に40歳過ぎで退職するまでのあいだ、スミスは熱心に講義——学生が筆記した法学講義ノート2種類と修辭学・文学講義ノートが講義の充実ぶりを示すが、弟子ミラーの証言もある——をする傍ら、大学の改革のために尽力し、またグラスゴーやエディンバラの知的サークルに加わって社交と談論を楽しんだ模様である。しかし、その間に植民地領有をめぐる英仏七年戦争（1756-63）が繰り広げられ、大ブリテンの財政軍事国家の矛盾が蓄積されて行き、それは財政赤字や植民地の処遇などの大問題となって『国富論』の執筆が要請される文脈となる。

教授スミスの在職期間はわずかに13年ほどである。その間にはまた、スミスのもとにロシアからも学生が送られてきた⁹⁾。同じころに清朝の中国はチュルゴのもとに学生を送った模様である。スミスはアングロ・アイリッシュの貴族、初代シェルバーン伯爵の子息トマス・フィッツモーリス（兄は後に首相となる第二代シェルバーン）の個人指導も引き受けている¹⁰⁾。

退職したスミスは、大蔵大臣ともなった議員のチャールズ・タウンゼンドの依頼を受けて、その甥のバックルー公爵（第二代アーガイル公爵ジョン・キャンベルの孫でもある）の家庭教師となって、フランスに赴き、ヴォルテールやケネーなど、当地の啓蒙哲学者と交流することになるし、帰国後もロンドンの知識人サークルに出入りして、在野の知識人たちと知的交流を続けた。そのなかには、ベンジャミン・フランクリン（1706-90）もいた。フランクリンはアメリカ植民地の郵政長官代理として大ブリテンに長く逗留していた重要人物であり、スミスにもアメリカの情報を提供したし、アメリカ独立にも影響を及ぼした¹¹⁾。帝国への野望、すなわち重商主義政策の危機という時代の趨勢は、前述のように、スミスに『国富論』を執筆・出版することを促し、『国富論』はアメリカ独立宣言がなされ、ヒュームが他界した1776年に出版されたのであった。

『国富論』についての方々の意見は、古典として評価するものであるが、しかし様々な評価がなされてきたとも言える。シュンペーターのようにさほど評価しない見解もある。独創性でチュルゴに劣るといっているのである¹²⁾。しかし、『国富論』が経済学（Political Economy）という新しい学問を興味深く、説得力を持って体系的に展開したことで、経済学が市民社会に広く認知され

たことは疑いえないであろう。勤労と改良を推進する啓蒙時代の自由で果敢な起業精神にも合致していたから、その影響力たるや巨大であった。

もとより、『経済表』(1758)などで知られるフランスのフランソワ・ケネーや『経済の原理』(1767)のサー・ジェイムズ・ステュアート,あるいは『商業すなわち市民の経済の講義』(1765-7)を残したナポリのアントニオ・ジェノヴェージの功績も否定できないであろうが、経済発展の原理を多角的に解明した『国富論』は、政治学や法学をも包摂した体系として、先行者の諸著作をはるかに超える、きわめて啓発的な社会科学の書であった。

そのような体系の著者の博学は、今日の専門家たらざるを得ない研究者の容易に真似のできないものである。今も偉大な学者のなかには博学者もいるが、スミスの博学は群を抜いているように思われる。それは使命感もあったであろうけれども、何よりも彼の強い好奇心がもたらしたのであろう。本稿はスミスの学問論を回顧するが、専門性と総合性を兼備した社会科学の形成者の学問精神を検証することは、専門学者たらざるを得ない現代の我々にとって大いに教訓となるであろう。

1 『エディンバラ評論』の学問論

前述のように、スミスはグラスゴー大学に採用される以前に、スコットランドの有力者によって世に出るチャンスを与えられ、エディンバラで1748年から冬学期に3度、25歳から28歳にかけて公開講義をした。ロスは哲学史と法学の連続講義としているが¹³⁾、フィリップスは修辞学講義¹⁴⁾と法学講義と考えている¹⁵⁾。そのノートが見つかっていないので決定的ではないが、講義では自然哲学、道徳哲学、法学、修辞学・文学など広範囲にわたる諸主題が取り上げられた可能性がある。遺稿集『哲学論文集』(1790)に収められた「天文学史」は初期のもので、公開講義の内容と関連があると見なされている。これまた珠玉の論考である「模倣芸術論」、「外部感覚論」、は「詩型論」とともに後の作品らしい¹⁶⁾。「古代物理学史」、「古代論理学と古代形而上学」という二つの断片は「天文学史」の系論であるから初期のものと思われる。

若きスミスの学問論としては1755年に『エディンバラ評論』に寄稿した、文壇の大御所サミュエル・ジョンソンの『英語辞典』の書評をもって嚆矢とできようが、内容的には1756年の第2号に寄稿した「同人たちへの手紙」と題するヨーロッパ学界展望がはるかに重要である。その概要は今ではよく知られているだろうが、それに最初に注目したのは内田義彦氏であった¹⁷⁾。内田氏はスミスにとってのルソーの重要性をつかみ取り、二人は「文明社会の危機」に直面していたと理解したのであった。この学界展望はスミスの33歳の時の論考であり、すでにスミスがイングランドとフランスの学問に並々ならぬ造詣があったことがうかがえる。

ヨーロッパ学界展望

「同人たちへの手紙」は書評対象をヨーロッパ全体に広げよと呼びかけている。スコットラン

ドにはまだ十分な書評対象はない。イタリアとエスパーニャのルネサンスはすでに衰え、ドイツでは洗練された学問は見られない。それに対してイングランドには「想像力・才知・創意」に富む文筆家が、シェイクスピア、スペンサー、ミルトン以来、多数存在しており、自然哲学もまた進んでいる。他方、フランスはつとに「美的感覚・判断力・適宜性・秩序」で優れ、デカルトのあと、デイドロとダランベールの編集する『百科全書』——「ベーコン、ボイル、ニュートンの思想が・・・秩序と明快さと見事な判断力をもって説明されている」(Essays, p. 245, 『哲学論文集』319ページ)——もあれば、ビュフォンの『自然誌』、レオミュール『昆虫誌』などがあり、またドゥ・プイ『快適感情の理論』、さらにルソー『人間不平等起源論』(1755)が注目に値する。

スミスによれば、イングランド人は自然哲学以外の、道徳、形而上学、抽象科学でも独創的であり、フランスにはデカルトしかないのに対して、ホップズ、ロック、マンデヴィル、シャーフツベリ、バトラー、クラーク、ハチスンがいて、彼らは独創性を目指した。

こうした差異がなぜ生じたのかはスミスの論点ではない。スミスは事実としてこういう差異があることを強調している。もとより、理由を尋ねても解答は困難だろう。学者が尊敬されているとか、思想信条の自由、学問の自由がある、競い合いがあるといったことしか出てこないであろう。

スミスは、文明・社会の本質の理解においてバーナード・マンデヴィル(1670?-1733)のパラドックスからルソーのパラドックスを引き出すべく、以下のように論じている。

二人とも、人間を、社会のなかで一緒に生活するのに適したものとする、すべての才能、習慣、技術について、同じく緩やかな進歩と段階的な発展を想定していますし、また二人とも、この進歩をかなりよく似た仕方でも叙述しています。両者によれば、人類のあいだで現在の不平等を維持している正義の諸法は、もともと、狡猾な人間と強い力をもつ人間が、彼ら以外の同胞に対して不自然で不正な優越性を維持するか、獲得するための発明物であったのです(Essays, pp. 250-1, 『哲学論文集』328ページ)。

スミスによれば、人間、特に若者は未開に引きつけられるのであって、羊飼いや田園生活への憧れがある。また危険な冒険を描いた騎士道やロマンスを好む。「ルソーは未開人の生活を最も幸福なものとして描いた」が、スミスはルソーに「放蕩なマンデヴィルの原理と思想」と「プラトンの道徳論の純粹さと崇高さ」、さらに「共和主義者の真の精神」を見た。この三要素はスミスが評価したものではなかっただろうか。スミスは最後にメスタージオとヴォルテールに触れている。

このようにスミスは、18世紀のイングランドとフランスの思想、文筆家の仕事に強い関心を持っていた。近代人は古代人を超えたという単純な進歩主義はスミスの思想ではないが、ここではとくにイングランドとフランスの18世紀の思想界、いわゆる「文芸共和国」に目を向けて

いるのである。ここでは論点にしていなが、登場人物のなかで大学教授はハチスンだけで、他はすべて在野の思想家である。細かなことを言えば、1755年に他界したモンテスキューへの言及がないし、オランダ共和国の学問への言及もないのが、いささか気になる。新ストア派として知られるユストゥス・リブシウスと国際法の父となったフーゴ・グロティウスはスミスの蔵書にもあり、特に後者には、法学講義にも明らかなように、スミスは関心を持っていたように思われる。ルネサンスの人文主義者もここに登場しないのは、同時代の学界展望なので不思議ではないが、しかし、エラスムスは他の著作にも登場しない¹⁸⁾。

2 「天文学史」の学問論

「天文学史」は翻訳もあれば研究もあるので、今ではよく知られているだろう¹⁹⁾が、アダム・スミスの学問論を広く展望し、掘り下げようという本稿の課題にとって、こうした初期著作も見ておくことが必要であろう。以下、引用と要約を交えて、スミスの議論を追ってみよう。

哲学の起源：驚異、驚愕、驚嘆

スミスは天文学史を興味深く描く。その着眼は天文学史そのものというより、むしろ人間の感情との関係にあると言ってもよい²⁰⁾。「天文学史」でスミスが行ったのは、自然現象に驚異の念を抱いた人間の認識としての哲学の発展の描写である。

驚異 (surprise), 驚愕 (wonder), 驚嘆 (admiration) は、しばしば混同されるけれども、・・・相互に区別される諸感情を示す語である。新奇で珍しいことは、厳密な適切さをもって驚異と呼ばれる感情を喚起する。意外なことが驚愕を、壮大なこと、また美しいことが驚嘆を喚起する (*Essays*, (p. 33), 『哲学論文集』 6 ページ)。

この三感情は好奇心と関係している。人間の知的関心は感情と連結しているというのがスミスの独創的な見解である。スミスは驚愕から考察する。「どんな種類の情動でも、精神を突然襲う時に、それが精神にもたらす激しい突然の変化が、驚愕の全体を構成する」 (*Essays*, p. 35, 『哲学論文集』10ページ)。精神が悲嘆に沈んでいる時に歓喜がもたらす驚愕と、逆に歓喜に揚々としている時の悲嘆の驚愕が最大である。対照的な感情の対抗は鮮烈さを高める。連続する感情の類似は不鮮明となる。習慣と慣習は感情の鮮烈さを削減する効果をもつ。

驚異はどうか。人間の精神は「異なる諸対象の間に発見される類似」の観察を好む。観察によって精神はすべての観念を配列し、組織化して、正しい種類と種目に回収しようとする。こうして「獣、鳥、魚、昆虫という自己運動能力の備わったすべてのものは、動物という一般的名称のもとに分類される」 (*Essays*, p. 38, 『哲学論文集』 14ページ)。その結果、抽象的な一般的名称が生まれる。人間は何かに出会うとそれを類似した種に帰属させようとする。しかし、

新奇なものは類別できない。そのとき驚異（不思議）の感情が生まれる。

次にスミスは想像力と観念連合に着目する。二つの対象が常に連続して現れることが観察されると、人間の想像力のなかでその二つは結合され、一方の観念は他方の観念を自動的に生み出す。これが観念連合で、それがいったん強固に確立されると、努力が不要になる²¹⁾。しかし、想像力が慣れているのと異なる順序で対象が現れると、新奇な現象の意外性に驚愕し、不思議に思う。そのとき人間精神は飛躍を媒介する中間物を探そうとする。こうして「中間的諸事象の鎖」を想定することが、想像力の滑らかな移行を可能にする唯一の橋となる。中間的諸事象という結合の鎖を発見すれば、驚異は消滅し、精神は平静になる。

こうして「存在の偉大な連鎖」が発見されていくことにもなる。自然は飛躍せずというのが、プラトン以来の自然観であった。

日食と月食は、かつては天球の他の諸現象のすべてにまさって人類の恐怖と驚きを喚起したが、今ではもう驚異的なことではないように思われる。というのも、それらの事物の通常の経路に結びつける、結合の鎖が発見されているからである（*Essays*, p. 43, 『哲学論文集』21ページ）。

哲学者と普通の人の世界理解は異なるが、それをスミスは専門家と素人の差異に例える。

染色工、醸造工、蒸留工などの、ごく普通の職人のいる仕事場へ我々が入ると、数多くの現象が、我々にはひどく見知らぬ不思議な順序で現れるのが認められる。我々の思考はそれに容易についていけない。我々はすべての二つの現象間に隔たりを感じ、それを埋めてそれらを接続するための中間的事象の鎖を求める。しかし、自分の技術の全操作の諸帰結に長年にわたってなじんでいるその職人自身は、そういう隔たりを感じない。それらは、慣習が、彼の想像力の自然の運動にしまったものに一致している。それらはもはや彼の驚異を喚起しない（*Essays*, p. 44, 『哲学論文集』23-4ページ）。

類似のことは音楽についても言える。

大半の人々には、完璧にうまく調子が合っていて調和しているように聞こえる音にも、音楽家のいっそう優れた耳には、最も正確な拍子と最も完全な一致の不足をともに感じるが、それと同じように、その全生涯を自然の結合諸原理の研究に費やしてきた哲学者のより実地訓練された思考は、より不注意な観察者には非常に緊密に連結されているように見える二つの対象間に、しばしば隔たりを感じるだろう（*Essays*, p. 45, 『哲学論文集』25ページ）。

哲学と結合原理

こうしてスミスは哲学を結合原理の学問だと言う。

哲学は、自然の結合原理の科学である。自然は、通常の観察で習得しうる最大限の経験によっても、孤立した先行するすべての事象と矛盾するかに見える事象に満ちているように見える。したがって、それらは、想像力の円滑な運動を妨げ、いわば不規則な突発と爆発で、想像力の諸観念を継起させ、そのため、いくぶんか・・・混乱と錯乱を導き入れる傾向がある。哲学は、これらすべてのばらばらな対象を一緒にする見えない鎖を示すことによって、この不協和で支離滅裂な諸現象の混乱状態に秩序を導入し、想像力のこの乱れを鎮め、そして想像力が宇宙の大回転を眺める時には、それ自体で最も快適で想像力の本性に最もふさわしい、平穏と落ち着いた調子を取り戻させようと努力する (*Essays*, pp. 45-6, 『哲学論文集』25-6ページ)。

したがって、スミスは、哲学は想像力の学問であると言う。哲学は崇高でもあり、哲学史は最も面白いとも言う。ここでは自然哲学史、天文学史を念頭に置いている。スミスは、哲学をそもそもの起源から、それが到達していると現在考えられている完成の頂上まで跡づけようと述べて、プラトン²²⁾、アリストテレスから、プトレマイオスの天動説、コペルニクスによる地動説への転換、ガリレオ、ケプラー、デカルトによる発展を跡づけ、ニュートンまで論じている。

哲学はすべての快適な学芸のうちで最も崇高なものであり、その諸変革は文芸世界で起こったもののうち最大かつ最も頻繁で、最も際立っている。したがって、その歴史は・・・最も面白いし、最も教訓的であるにちがいない。だから、世界中で我々がその歴史を何ほどか知っている唯一の地域である世界のこの西方諸地域で、学識と才能のある人々が次々に採用してきたすべての異なる自然の体系を吟味しよう。・・・我々の主題に属する特定の観点からのみそれらを考察しよう。そしてそれらの各々が、想像力を落ち着かせ、自然の劇場を、さもなければそう見えたはずよりも、まとまったものにし、したがってより壮麗な光景にするのに、どの程度適していたかの考察で満足しよう (*Essays*, p. 46, 『哲学論文集』26ページ)。

哲学の起源

こうしてスミスは哲学の起源を次のように結論している。「人類は、法、秩序、安全が確立される前の社会の初期時代には、自然の一見ばらばらな諸現象を統合している諸事象の隠れた鎖を発見しようとする好奇心をあまり持たなかった」 (*Essays*, p. 48, 『哲学論文集』28ページ)。むしろ不規則な自然現象は未開人を驚かせ、恐れに近い畏敬を抱かせる。それは「神、悪魔、

魔女、守り神、妖精の好意や不機嫌」のせいだとした。「ユピテルの見えない手」が作用しているとは理解されなかった。ここに多神教と迷信の起源がある (*Essays*, p. 49, 『哲学論文集』30-1ページ)。ところが、

法が秩序と安全を確立し、生活の不安がなくなると、人類の好奇心が増大し、恐れは減少する。今や彼らが享受できる余暇が、彼らを自然諸現象に前より注意深くさせ、最も些細な不規則性にさえ気づかせ、それらすべてを接続している鎖が何であるかをいっそう知りたがるようにする (*Essays*, p. 50, 『哲学論文集』31ページ)。

人類を哲学、つまり自然の様々な現象を結合している、隠された関連を解明しようとする科学の研究に駆り立てる第一原理は、その発見から得られる何らかの利益の期待ではなく、驚異である。そして彼らはこの研究をそれ自身のために、それ自体独自の快樂または善として追求するのであって、哲学が彼らに他の多くの快樂の手段を与える傾向を持つことを顧慮してそうするのではない (*Essays*, p. 51, 『哲学論文集』32ページ)。

スミスはこうして具体的に最初の哲学者の登場へと話を進める。「世界の西方諸地域で、最初に文明社会の状態に達した国は、ギリシアと、そのシチリア、イタリア、小アジアの植民地」であり、そこに「最初の哲学者」が登場した。法と秩序はそれ以前にアジアとエジプトに確立されたが、記録がないので哲学が発展したかどうかは分からない。ギリシアは安全でもあったので、ホメロス (Homer)、アルキロコス (Archilochus)、ステシコロス (Stesichorus)、シモニデス (Simonides)、サッフオー (Sappho)、アナクレオン (Anacreon) が生まれた。

哲学の二派の創始者、ターレス (Thales) とピュタゴラス (Pythagoras) はアジアの植民地と島の出身である。自然の結合原理の研究ではピュタゴラス学派がイオニアの哲学者より進んでいたが、それでもその学説は混乱していた。秩序ある体系に近いものはイタリア学派のエンペドクレス (Empedocles)、アルキュタス (Archytas)、ティマイオス (Timaeus) などの学説に見られる。しかし、哲学が一般的な知識となるのは、ソクラテス学派のプラトンとアリストテレスからである。プラトン以前のもう一つの学派であるレウキッポス (Leucippus)、デモクリトス (Democritus)、プロタゴラス (Protagoras) の哲学はプラトンの雄弁に屈し、後代にエピクロスが復活するまで忘却されていた²³⁾。

天動説とは何か

ここからスミスはまず天動説の説明に入る。

すべての自然の出来事のうちに、天体現象は、その壮大さと美しさによって、人類の好奇心の最も普遍的な対象である。・・・星はいつも同じ場所に、互いに同じ距離を保ちなが

ら現れ、毎日、地球の周囲を、天の両極から天の赤道へと次第に広がる平行な円軌道上を回転しているように見えたので、自然に星は、そのように多くの宝石のように大空の凹面に固着し、その個体の日々の回転で運ばれているという徴候をすべて示していると考えられた。・・・

太陽と月は、他の天球に対して、距離と位置をしばしば変化させるので、諸恒星と同一の天球に付着しているとは理解されなかった。・・・太陽と月は、個性的で透明の球体の凹面に付着していて、その回転によって、地球の周囲を運動すると想定された (*Essays*, pp. 53-4, 『哲学論文集』 35-6ページ)。

ところが、星のなかに、運動が他の星より不変でも一樣でもなく、他の諸天体に対する位置を変化せる5つが観察された。大抵は東に向かって運動しているが、静止するときも、西に向かうときもあるように見えたので、この星は惑星と呼ばれ、土星、木星、火星、金星、水星と名づけられた。これらも透明な凹面の球体の内面に固着しているとされた。これが天文学の最初の規則的体系である「同心天球の体系」で、イタリア学派で教えられ、アリストテレス、エウドクソス (Eudoxus)、カリッポス (Callippus) が完成した。これは太陽、月、恒星の運動を十分に結合しており、それ以外の天体が発見されなかったら、後世まで長く信じられたかもしれない。この体系は、「自然観の新奇性と美しさ」によって「驚異と驚嘆」を引き付けた。この美しさは諸天体の運動と距離に調和比があるという考えをプラトンにもたせた。

しかし、5惑星の運動は天球の順行的運動、前進運動に逆行もすれば、停止もする。それは人間の「想像力の自然的性向」に反する。そこで「関連の欠如、切れ目、隔たり」を埋めようと想像力が働く。こうして「多くの天球が天を回転しているという仮説」が「中間的諸事象の鎖」として登場する (*Essays*, p. 57, 『哲学論文集』 40-1ページ)。エウドクソスはこのような天球をそれぞれの惑星に4個与えた。太陽、月には2個、諸惑星には1個を割り当て、天球の数は27になった。これですべての運動が結合されるとした。しかし、それでは不足と気づいたカリッポスは34に、アリストテレスはそれでも不足で、56とした。フラカストーロ (Fracastoro) は72にした。こうしてこの体系は複雑化した。

より整理された体系がアポロニオス (Appollonius) によって考案され、ピッパルコス (Hipparchus) によって完成され、プトレマイオス (Ptolemy) によって伝えられたが、それは「離心天球と周転円」という、より人為的な体系である。

離心天球、周転円、離心天球の中心の回転という創案は、・・・ばらばらの諸現象を結合し、諸天体の運動についての人間精神の概念に、調和と秩序を導入するのに役立つ (*Essays*, pp. 61-2, 『哲学論文集』 45ページ)。

だが、これは不完全であった。それでも「同心天球の体系」と「離心天球の体系」が古代世界で信頼された二つの体系であった。天体の運動は完全な円運動であると考えられていた。スミスはさらにクレアンテス (Cleanthes) とストア学派の哲学者の説を紹介している。それは太陽、月、5惑星は諸恒星と同様に、それぞれ独特の「生命的な運動原理」をもって運動しているという説であるが、これには天体の調和した運動を説明する結合原理がない。離心天球の体系が最も正確であり、それはプトレマイオスによって整理された。彼の計算はその体系の優位を確定的にしたが、天文学者と数学者には受け入れられたものの、哲学者のどの派にも受け入れられなかった。

哲学者たちはヒッパルコス時代のずっと前に自然の研究をやめてしまった。キケロもセネカも、またプルタルコス (Plutarch) もヒッパルコスの体系に注目しなかったが、大プリニウス (elder Pliny) は言及した。

体系は機械に似ている。

体系は、すでに現実に遂行されている種々の運動や効果を、空想のなかで結合するために創案される想像上の機械である。ある特定の運動を遂行するために創案される最初の機械は、いつでも複雑になっている。そして大抵、後続の職人たちが、最初に使用されたよりも少ない車輪と少ない運動原理で、同じ効果をより容易に生み出しうることが発見する。同様に、最初の体系はいつでも最も複雑であり、すべての一見ばらばらな二つの現象を結合するのに、それぞれ一つ特定の結合の鎖または原理が必要だと考えられるのが普通である。しかし、ある種類の事物全体に起るすべての一致しない出来事を統合するのに、一つの大きな結合原理で十分なことが後でわかる、ということがしばしばある (*Essays*, p. 66, 『哲学論文集』51ページ)。

プトレマイオスの体系は完璧ではなかったが、ローマで権威を維持した。やがてローマ帝国の崩壊と数世紀に及ぶ「法と秩序の破壊」によって、自然の結合原理の研究はなおざりとなった。ローマの没落後、「回教君主の帝国」が「科学の育成に必要な平穩」を享受できた最初の国であった。

寛容で気前のよい王侯たちの庇護の下において東方で、古代ギリシア人の哲学と天文学が復興され確立され、彼らの穏やかで、公正で、宗教的な統治が、その広大な帝国に行き渡らせた平穩は、自然の結合原理を探究しようという人びとの関心を復活させた。…彼らは、多くのギリシア哲学者、とりわけ、アリストテレス、プトレマイオス、ヒポクラテス、ガレノス (Galen) の著作をアラビア語に翻訳し、非常に熱心に研究した (*Essays*, pp. 67-8, 『哲学論文集』53ページ)。

彼らは重要な改良も加えた。彼らは黄道の傾斜をより正確に計算し、プトレマイオスの天文表のずれを修正する新しい天文表を作り、地球の円周の測定も行った。これはスペインに伝えられたが、プトレマイオスはアラビア語からラテン語に翻訳され、アヴェロエス (Averroes) とアヴィケンナ (Avicenna) の哲学が研究された。

プトレマイオスの天文表は、基礎になっている観察が不正確であるために、諸天体の実際の位置から全く乖離してしまっていたので、9世紀に、同じ仮説に基づいて、その狂いを修正するためにアル・マムーン (Almamon) の天文表が作成された。それも数世紀後には、同じ理由から、再び同じように役に立たなくなった (*Essays*, p. 70, 『哲学論文集』56ページ)。

コペルニクスの体系

こうして修正がプーアバハ (Purbach) やレギオモンタヌス (Regiomontanus) によって繰り返されたが、やがてコペルニクスが新しい体系を構想した。彼の体系は地球が太陽を回るとするもので、周転円の助けなしにより少ない運動で天空の複雑な現象を結合した。コペルニクスは自説を30年間、隠していたが、それが世間に知られたとき、普遍的に否認された。数名の弟子だけが「尊敬と驚嘆」をもって受け入れた。ラインホルト (Reinholdus) はより正確な天文表を作成した。天文学者はまもなくこの体系を受け入れたが、地球が高速回転をしているというのは想像力を超えていた。ティコ・ブラーエ (Tycho Brache) はプトレマイオスの体系とコペルニクスの体系を合成した。コペルニクスの死後100年、ティコの死後30年たって、ガリレオ (Galileo) によって完全な解答が出された。

望遠鏡を天文学に初めて応用したガリレオは、その助けによって、木星の周りを回転すると同時に、木星が地球または太陽の周りを回転するのにも随行する衛星を発見し、月が地球の周りを回転すると同時に、太陽の周りの地球の回転にも随伴するというのを、自然の類比に前ほど相反しないように思わせた (*Essays*, p. 83, 『哲学論文集』74ページ)。

同じころドイツにいたケプラー (Kepler) が問題にしたのは、惑星の数は地球を入れてなぜ6なのか、惑星は太陽からの距離がなぜ不規則になっているのか、距離と周期的回転に要する時間のあいだに何か比例関係があるのか、といった疑問であった。ティコに招かれ、彼と弟子の観察記録を得たケプラーは、火星の軌道は完全な円ではないこと、その直径の一方は他方より長いこと、それは太陽を焦点とする楕円に近いこと、惑星の運動は等速ではなく、太陽に近くなれば早くなり、離れば遅くなることを発見した。こうして天体の運動は等速の円運動であるという従来の根本観念が否定された。

これは容易に受け入れられなかった。ガッサンディ (Gassendi) もデカルト (Des Cartes) も、ウォード (Ward) やブリオ (Bouillaud) も、コペルニクスにこだわった。

ケプラーはもう一つの類比を導入した。太陽からの諸惑星の距離とそれらの周期運動に要する時間とのあいだには一様な関係が観察される。諸惑星の周期は、距離との比例より大きく、距離の平方との比例よりも小さい、周期の平方は距離の平方にほぼ比例する、ということである。二つの類比の正しさはカッシーニ（Cassini）の観察で確立された。

けれども、「地球や他の諸惑星のような、計り知れず重い物体が、太陽の周りを信じがたい速度で回転すると考える」ことは想像力にとって困難と感じられた。「太陽から周囲の空間へ放出され、太陽の軸の周りの回転と共に動き回り、諸惑星をとらえて、諸惑星の重さと静止への強い性向にも拘わらずそれらを無理やり太陽系の中心の周りに回転させるもの」（*Essays*, p. 92, 『哲学論文集』85ページ）とは何か。この非物質的能力、この結合の鎖が何であるかは難問であった。

デカルトは、この見えない鎖（invisible chain）がどこにあるかを正確に確かめようと企て、またあらゆる順序のうちで想像力に最もなじんでいる順序で継起し、高速運動と自然的慣性という諸惑星のまともならない両性質を結びつける、一連の中間的事象に与えようと企てた最初の人であった（*Essays*, p. 92, 『哲学論文集』85ページ）。

デカルトが物質の真の慣性が何であるかを説明した。スミスは真空を否定したデカルトの渦動説を詳しく説明して、デカルトは「コペルニクス体系の最大の困難だった惑星という巨大な物体の高速運動を、想像力になじんだものにして努力した」が、「デカルト哲学は、今やほとんど普遍的に拒否され始めている」（*Essays*, p. 96, 『哲学論文集』91ページ）としている。デカルトは自分で熱心に天空を観察しなかったし、従来の観察に注意を払わず、ケプラーが見出した不規則性を自分の体系に適合させようともせず、惑星運動に完全な一様性を期待できないという見解に満足した。スミスは、天文学研究におけるデカルトの経験不足を指摘している。

ニュートンの体系

こうしてニュートンが登場する。

アイザック・ニュートン脚が初めて、天文学者たちが惑星運動に発見してきたすべての恒常的不規則性に適合する惑星運動の物理的説明を与えることを企てた。デカルトが、惑星運動をまとめようと努めた物理的結合は、衝撃の諸法則であった。それらはすべて物質の慣性から生じるので、すべての継起の順序のうちで想像力が最もなじんでいるものだった。この性質の次には引力という性質ほど我々がよく慣れているものはない。我々が物質に働きかける時には、必ず引力を観察する機会がある。したがって、想像力がこれまで惑星運動に注意を向けたときに感じたすべての困難を完全に取り除く、それほどなじみ深い結合原理によって、惑星運動を結びつけうることをアイザック・ニュートン脚の並外れた天才と英明さが発

見したとき、哲学でこれまでなされた最も幸福なそして最も偉大で最も驚嘆すべきと今や言
いうる改善を成し遂げたのである (*Essays*, pp. 97-8, 『哲学論文集』93ページ)。

スミスはコペルニクスの『天体の回転について』(1543)を所蔵していたし、ニュートン『プ
リンキピア』(『自然哲学の数学的原理』)の1726年版も所蔵していた。ニュートンの弟子で優れ
た数学者であった同郷のコリン・マクローリンの『アイザック・ニュートン卿の諸発見の説明』
(1748)はスミスの蔵書にないが、スミスは関連文献に精通していた²⁴⁾。スミスは、ニュートン
の体系を詳細に説明しているが、それは省略しよう。最後にスミスはこう述べている。ニュー
トンの体系は「哲学においてこれまで確立された最も普遍的な帝国の獲得」である。どんな懐
疑的な人間もこの体系の強固さと確実性を否定できない。それは「人間によってなされた最も
偉大な発見」であり、「最も重要で、最も崇高な諸真理の広大な鎖の発見であり、諸真理の全体
は我々が毎日経験する現実という、一つの主要な事実によって結合されている」(*Essays*, pp.
104-5, 『哲学論文集』103ページ)。

スミスは自然現象の結合原理、すべての事物の運動を結合する学問として、哲学を考えた。
道徳哲学者としてスミスは人間社会の結合原理を人々の間の同感に求めるであろう。『国富論』
という新体系では利己心(向上心)に発する分業と交換という結合原理によって商業社会の運
動を解明しようとするであろう。しばしば言われるように、スミスの天動説から地動説への転
換の分析はトマス・クーンのパラダイム論²⁵⁾の部分的な先取りでもあった。

『プリンキピア』に表現されたニュートンの体系は古典物理学と言われる。それはアインシュ
タインの相対性理論の登場によっていわば乗り越えられたことになっており、さらに量子力学
の発展によって宇宙はランダムな微粒子からなっていると理解されている。スミスは宇宙の起
源を問わなかった。今では宇宙の起源が関心を引いている。

ニュートン力学は時間と空間の絶対性を前提とした運動法則の貫徹する世界であるが、ア
インシュタインは空間も時間も観察者の運動状態に左右されるし、物質とエネルギーの存在に
よって歪みを受けると考えた。量子力学によれば宇宙は無秩序な混乱した振る舞いをする。最
近では相対性理論と量子力学は「超ひも理論」で統合できるのではないかという²⁶⁾が、クーン
のパラダイム論ではそれぞれの体系は相対的な説明原理として両立することになり、世界の複
数性理解、パラダイムの共存という結論が導かれる。

いずれにせよ、天文学史を跡づけたスミスは、天体の運動の結合原理に着目して、人間感情
と関連づけた一貫した議論を展開している。哲学は事物や運動の結合原理の学問であるとい
うことでのスミスの理解は、自然と社会の理解にとって重要な視点を与えるであろう。自然的存
在、道徳的存在、経済的存在、政治的存在としての人間の結合原理を追及する学問として認識
論を含む人間本性論、道徳哲学、経済学、政治学や法学を構想できるであろう。それはおおよ
そのところ、すでにヒュームの構想²⁷⁾にあったものである。実際にスミスは道徳哲学、法学・
政治学、経済学を講義と著作で展開することになった。

3 『道徳感情論』における学問論

『道徳感情論』は第6部（第6版では第7部）「道徳哲学の諸体系について」において道徳哲学史を説いている。これは学問論にほかならない。

徳とは何か：適宜性，慎慮，慈愛

スミスは道徳哲学史を回顧して、道徳哲学の基本問題は、まず徳（Virtue）とは何か、第二に是認（Approbation）と否認（Disapprobation）はいかにして行われるか、その原理は何であるかだとして、議論まとめている。第一の問題について、大きくスミスは三つの立場に整理している。

第一に、徳は適宜性（Propriety）にあるとするものがあり、これはプラトン、アリストテレス、ゼノン、クラーク、ウォラストーン、シャーフツベリである。

ある人びとによれば、精神の有徳な調子は、どれか一つの種類の意向にあるのではなく、我々のすべての意向の適切な統治と方向づけとにあるのであって、それらの意図は、それらが追求する対象に応じて、そしてそれらの追求の激しさの程度に応じて、有徳でも悪徳でもありうる。したがって、これらの著者によれば、徳は適宜性にあるのである（*TMS*, p. 266, 『道徳感情論』下、223ページ²⁸⁾）。

第二に、徳は慎慮（Prudence）であるとするものとしてエピクロスを挙げている。

他の人々によれば、徳は、我々自身の私的な利益と幸福の賢明な追求に、あるいは、この目的だけを目指す利己的な意向の適切な統治と方向づけとにある。したがって、これらの著者の意見では、徳は慎慮に存する（*TMS*, p. 266, 『道徳感情論』下、223ページ）。

スミス自身は慎慮を重視した。エピクロスはエピクロス学派の学祖として影響力があった。近代においてもエピクロスの思想は快楽主義（エピキュリアン）として賛否両論をかきたてたが、300点とも言われる彼の著作はすべて失われたので、その思想は弟子たちの著作から推察するほかにない模様である。弟子のなかにはルクレティウスのような徹底した原子論者がいる。スミスはルクレティウスの『事物の本質について』²⁹⁾を所蔵していた。スミスはエピクロスを快楽主義者として以上に慎慮の徳の思想家として登場させているのであるが、彼の快楽主義を無視しているわけではないことは引用文に明らかであろう。

第三に、徳は慈愛（Benevolence）にあるとするものとして、折衷主義者、カドワース、ハチスンを挙げている。スミスはグラスゴー時代の師であるハチスンの道徳哲学を絶賛したが、しかしハチスンが自己規制、慎慮、節制を無視ないし軽視した点、自愛心（Self-Love）に徳性を

認めない点を批判している。自己愛に徳性があるというのは、これまでの有力な思想的伝統であるキリスト教、自然法、共和主義のどれにおいても退けられた異端的な思想であった。それはエピクロス主義として伝統によって忌避された思想である。

他の一組の著作者たちは、徳を我々自身の幸福を目指す意向にではなく、他の人々の幸福を目指す意向だけにあるものとする。したがって、彼らに従えば、利害関心のない仁愛が、何かの行為に徳の性格を刻印しうる唯一の動機なのである (TMS, p. 263, 『道徳感情論』下, 223-4ページ)。

それではスミスの立場はどれであろうか。ここには徳は正義であるという議論は隠れている。古典古代の4大徳は、正義 (justice)、慎慮 (prudence)、節制 (temperance)、剛毅 (fortitude) であったが、スミスの整理は独自である。スミスは『道徳感情論』の本論では社会秩序の原理を適宜性と関係の深い正義に求めた。そして同感を適宜性や正義と不可分の感情として、また人間愛の発露として強調もした。スミスは、観察者の当事者への同感と当事者 (被観察者) の自己規制 (情念統制) による観察者への歩み寄り (これも同感であろう) によって、そしてまた想像上の相互の立場の交換によって、感情レベルでの相互理解が可能となるとした。それこそまさに同感であり、相互的な同感の交換である。

こうした同感から適宜性と正義が基礎づけられるという見解を示すとともに、スミスは正義と慈恵を対置して、慈恵なき社会は快適ではないが、正義なき社会はそもそも成立しないとして、正義を決定的に重視した。その意味ではスミスは正義を徳として最も重視したと言わねばならない。しかし、スミスは、正義はだれでもさほど努力せずに守れる消極的な徳だとも評価したから、真に徳と言える積極的なものとしては、その他の徳の卓越を考えていたとも考えられる。

スミスは、徳は卓越であるという定義を認めているのである。これは伝統的な言語慣習にしたがった言説であろう。しかし、スミスは適宜性も慎慮も慈愛もそれぞれ徳として評価しているのではないだろうか。それどころか、自制した利己心にも徳性を認めるのがスミスである。スミスは利己心に自己改善・勤労・勤勉の徳の源泉を見た。スミス自身は自分の立場をこの三つの総合に立つものとしたように思われるが、その中心に置かれているのは正義にも自制した利己心にも大いに関係のある慎慮であると結論すべきであろう。

人は富と名誉と地位を目指す競争において、すべての競争相手を追い抜くために、できる限り力走してよいし、あらゆる神経、あらゆる筋肉を最高に用いてよい。しかし、競争相手の誰かを押しつけるか投げ倒せば、観察者たちの寛大さはすべてなくなる。それはフェア・プレイの侵犯であって観察者の許し得ないことである (TMS, p. 83, 『道徳感情論』上, 217-8ページ)。

市民や労働者がフェア・プレイ、すなわち正義を守って全力で生きることをスミスは肯定した。彼の個人的な価値観が仮に違っていてもそうである。スミスはしばしば、ストア派の平静（アタクシア）の思想、情念統制論に影響されているかに見える。もちろん影響されているが、その程度が問題で、利己心を肯定するのもスミスであるから、スミスにおけるストア主義は過度に強調すべきではないだろう。スミスは過度な禁欲主義を支持しなかったし、ストア派的な不動心に人間としての冷酷さを見ている。

それではスミスは、エピクロス派なのだろうか。スミスは文明化した大衆社会の民衆は、多かれ少なかれ、快樂主義になりがちであるという事実認識を抱いていたように思われる。しかし、それが彼自身の個人的価値観であったかという点、そうではないと思われる。けれども、自分の個人的価値観や、好み、趣味を押し出すことはスミスの学問精神ではない。公正、公平をスミスは目指したように思われる。いかに困難でも、公正な視点から社会的価値を確立しようとスミスは努めたように思われるのである。

是認と否認の原理は何か

次に「是認と否認の原理は何か」であるが、これもスミスは三つの立場があるとする。第一に自愛心（Self-Love）から起こるとするものがあり、これはホッブズの見解である。第二に理性（Reason）から起こるとするもので、カドワースの見解である。第三に感情（Sentiment）から起こるとするもので、これはハチスンの見解である。

スミスはまずホッブズ説を少し詳しく説明して、同感に利己的な原理でないと断言している。スミスの説は詳しく吟味するに値するが、ここでは簡単にまとめておこう。スミスは、大きく分ければ、感情説であるが、そうだとすると、ハチスンが厳密には感情というより道徳感覚（Moral Sense）に求めた点を批判し、ヒュームの感情説を評価した。けれども、スミスはヒュームが是認を効用（Utility）への同感に還元した点を批判した。スミスによれば、是認・否認は対象への直接的な同感によるのであって、効用の有無を考量するものではない。無垢な人に暴力をふるう暴漢を見れば、観察者は憤慨をかきたてられ、当然、暴漢を処罰するように求めるであろう。それは社会の効用を考えたうえのことではなく、本性的にそのように感じるというのである。スミスが言っているのは義憤である。したがって、スミスは「怒り」を悪魔的な感情で、何ら益をもたらさないとして「怒り」の制御を説いたセネカ³⁰⁾に同調しないであろう。こうした個々の感情についてのスミスの分析は実に興味深いものがあるが、本稿ではこれ以上、詳論することはできない。

4 『国富論』におけるヨーロッパの大学の現状論

スミスは古代ギリシアおよびローマの学問を高く評価していた。それは「天文学史」にも『道徳感情論』にも明らかである。そして『国富論』は古代と近代の学問・教育について掘り下げ

た議論を持っている。第5編の第1章「主権者または国家の経費について」の第三節の第二項「青少年教育のための施設の経費について」と「あらゆる年齢の人びとの教化のための施設の経費について」の一部分がそれである。その議論は相当に詳細である。スミスは、教育は国家の役目であるという建前に立っているが、議論は自由競争による質の確保に力点を置くもので、国家による手厚い財政支援をスミスは否定しているように見える³¹⁾。教育施設の収入の考察が眼目であるが、スミスは学校や学寮（カレッジ）が依存する公的寄付財産が、設置目的の推進に寄与したかどうか問うことから議論を始めている。

教師たちの精励をうながし、能力を改良するのに寄与しただろうか。教育の進路を、自然に向かっただろうよりも、個人にとっても公共にとっても有用な、目標にふりむけただろうか（*WN*, Vol. II, p. 759, 『国富論』四, 14ページ³²⁾）。

スミスの解答は、寄付財産は必然的に教師の精励を減少させるというものである。基金から決まった俸給を受け取る場合、専門職での成功や名声は関係がない。生徒の謝礼や授業料が報酬になる場合は、教師には「精励の必要性」があり、教師は「能力と勤勉」によって受講生の好意的な評判を得なければならない。謝礼や授業料を受け取ることが禁じられている大学では俸給がすべてであるが、この場合は、教師の利益は任務と対立している。

できるだけ安易に暮らそうというのが各人の利害関心であり、もし彼の報酬が、きわめて骨の折れる任務を何ら遂行してもしなくてもまったく同一であるならば、通俗的に理解された限りの彼の利益は、間違いなくその任務を完全に無視するか、あるいはそうすることを許さないような権威に彼が服している場合には、その権威が容認する限り不注意に、いい加減に遂行することである。・・・オックスフォード大学では、大学教授の大部分は、このところ多年にわたって、教えるふりをするこゝろさえまったくやめているのである（*WN*, Vol. II, p. 761, 『国富論』四, 16-7ページ）。

この引用文は有名である。オックスフォードの沈滞はベリオルに学んだスミスが経験しただけではなく、ギボンもまた証言している。基金の乏しいスコットランドやドイツ、アメリカ植民地の大学は活気があった。植民地からはしばしば大学建設のために母国へ寄付集めに来た。

外部管轄権の弊害

大学が上位団体に服従している場合は、上位者たちに任務遂行を強いられる。しかし、それはせいぜい一定時間生徒につきあうこと、一定回数の講義をすることなどにすぎない。講義がどうなるかは教師の勤勉さ次第であるとスミスは言う。

この種の外部からの管轄権は、無知のまま恣意的に行使されやすい。それは、その性質上、恣意的で独断的なものであり、またそれを行使する人は、自分でその教師の講義に出席するのではなく、おそらく、その教師が教えるのを仕事としている学問を理解しているのでもないだろうから、判断力にもとづいて管轄権を行使することは、めったにできない。職務上の横柄さからも彼らはしばしば、管轄権をどう行使するかについて無関心であり、気まぐれに、また正当な理由もなしに、教師を非難したり免職したりしがちである（*WN*, Vol. II, p. 761, 『国富論』四, 18ページ）。

これは上位者、上部権力批判である。これは今様に言えば、いわば文部科学省のような上位機関による統制や監視、介入を退けるものであろう。スミスはその権力に服する人間をこう描く。

そのような管轄権に服している人は、それによって必然的に墮落し、社会でもっとも尊敬すべき人びとのうちの一人ではなく、もっとも卑しく軽蔑すべき人びとの一人になる。彼がつねに身をさらしている劣悪な待遇から効果的に自身を守りうるのは、有力な保護によるしかないが、こうした保護を得るには、専門職における能力や勤勉によってではなく、上位者たちの意思へのおもねりによってであり、彼がその構成員である団体の権利や利益や名誉を、いつでも彼らの意思にたいして犠牲に供する用意ができていくということによってである。フランスの大学の運営にかなりの期間かかわったことのある者ならだれでも、この種の恣意的な、外部からの管轄権が自然に引き起こす結果に気づく機会があったにちがいない（*WN*, Vol. II, p. 762, 『国富論』四, 18ページ）。

このフランスの大学の外部管轄権の帰結が具体的に何かは分からないが、フランスの主だった啓蒙哲学者は大学教授でなかったことを思えばよいだろう。フランスの大学は人材が枯渇していた。スミスは教会と大学が人材の奪い合いをしているとして国ごとに比較している。

教会と大学——人材の争奪

スミスはこう述べている。

教会の聖職給の大部分がきわめて控えめな国では、大学の教授職は、一般に、教会の聖職給よりも定収入の多い地位である。このばあい、大学はその構成員を、その国のすべての教会人から引き抜いたり、選んだりすることができるのであって、教会人は、どの国でも、文筆家の最大多数の部分になっているのである。逆に、教会の聖職給の多くが極めて高額のところでは、教会は自然に、そのすぐれた文筆家の大部分を大学から引きよせる（*WN*, Vol. II, p. 810, 『国富論』四, 105ページ）。

スミスはヴォルテールの言として、「言論界ではたいして著名でないイエズスのポレー神父 (Father Porrée) が、読むに値する本を書いたフランスで唯一の教授である」と紹介し、17世紀の原子論者として著名なガッサンディも教授から教会に転じたことに触れて、ヴォルテールの観察はすべてのカトリック諸国に当てはまると信じて書いている。もとよりスミスはヴィーコのことには知らなかった。

それらの国のどこでも、教会がそこから優れた文筆家を引き抜けそうもない法律と医学の専門者をおそらく別として、大学の教授である優れた文筆家はきわめて稀にしか見出されない。ローマ教会については、イングランド教会がキリスト教世界ではずばぬけて豊かで、寄付財産も最も多い教会である。したがってイングランドでは、教会が絶えず大学から最も優れた、最も有能な構成員をすべて引き抜いていくから、ヨーロッパで優れた文筆家として知られ、傑出している老齢の学寮指導教師は、どのローマ・カトリック国とも同様、そこには稀にしか見られない。これに反して、ジュネーヴ、スイスのプロテスタント諸州、ドイツのプロテスタント諸国、ホラント、スコットランド、スウェーデン、デンマークでは、それらの国が生み出した最も優れた文筆家は、たしかに全部ではないにしても、大部分は、大学教授であった。それらの国では、大学が絶えず教会からその最も優れた文筆家をすべて引き抜いているのである (WN, Vol. II, p. 811, 『国富論』四, 106-7ページ)。

自由な競走

スミスの視点は競争の有無にすえられている。自由な競走があれば、勤労・実力・評判によって教師・知識人は向上できるというのである。競争は学生においても重要である。スミスは学寮 (カレッジ) の自由選択ができないことを、奨学金などの慈善基金の欠点として挙げている。スミスはスネル奨学金を得たのでベリオルしか選択肢がなかった。「慈善基金による学生が、最も好む学寮を自由に選んでよいなら、そういう自由は、おそらく、さまざまな学寮のあいだにいくらかの競争を引き起こすのに寄与するだろう。」しかし「各学寮で、各学生にすべての人文学や科学を教えるべき指導者または教師を、その学生が自発的に選ぶのではなく、学寮の長が任命する」のであれば、たまたし指導者または教師に怠慢、無能、劣悪な対応があった場合に、教師の変更が許されないならば、学寮内の教師の間での競争を根絶し、教師の勤勉と学生への配慮を減少させるであろう。「学寮や大学の規律」は学生のためではなく、教師の利益、安逸のためにある (WN, Vol. II, pp. 762-4, 『国富論』四, 19-21ページ)。

本当に出席するに値する講義には、出席を強制する規律など必要ではないし、それはそうした講義が行われているところではどこでも、よく知られているとおりである (WN, Vol. II, p. 764, 『国富論』四, 22ページ)。

イングランドではギリシア語とラテン語を教えている公立学校は大学に比べるとはるかに腐敗していないが、それは教師の報酬が授業料に依存しているからである、とスミスは指摘する（*WN*, Vol. II, p. 764, 『国富論』四, 23ページ）。大学の起源は教会の団体で、教会人の教育のために、法王の権威によって創設された。キリスト教が国教となったとき、くずれたラテン語がヨーロッパ西部の共通語となっていた。その後、野蛮民族が侵入し、ラテン語は共通語でなくなりましたが、教会の行事はラテン語で行われた。そこで二つの言語が確立された。司祭の言語と国民の言語、聖俗の言語、学問の言語と無学の言語がそれである（*WN*, Vol. II, p. 765, 『国富論』四, 25-6ページ）。

ここからスミスは古代ギリシアの学問へと遡る。

5 『国富論』における「古代ギリシアの哲学」

古代ギリシア哲学は三大部門に分かれていた。物理学すなわち自然哲学と、倫理学すなわち道徳哲学と、論理学がそれである。この全般的区分はものごとの本性と完全に一致しているように思われる（*WN*, Vol. II, p. 766, 『国富論』四, 28ページ）。

自然哲学の起源

自然の大きな現象、すなわち天体の回転、日月蝕、彗星、雷、稲妻、その他の異常な大気現象、また動植物の発生、生命、成長、死滅は、必然的に驚異の念をかきたて、そのため自然にそれらの諸原因を研究しようという人類の好奇心を引き起こす対象である。はじめは迷信が、それらすべての驚異的な現象を神がみの直接の営みに帰することによって、この好奇心を満たそうとした。のちには哲学が、神がみの営みより身近な諸原因、つまり人類がそれよりよく知っている諸原因から、それらの現象を説明しようとつとめた。それらの大現象は人間の好奇心の最初の対象であるから、それを説明しようとする科学も、当然に、最初に開発された学問分野であったに違いない。したがって歴史が何らかの記録をとどめている最初の学者は、自然哲学者だったようである（*WN*, Vol. II, pp. 767-8, 『国富論』四, 28-9ページ）。

スミスのこの議論は、D・ステュアートの言う「推測的歴史」による考察にほかならない。驚異と好奇心が自然哲学の起源だという理解は、「天文学史」にすでに見られるものであった。

道徳哲学の起源

スミスは続いて道徳哲学がいかんにして生まれたかを推察する。

世界のどの時代、どの国でも、人びとは互いに他人の性格や意図や行為に注意を払ってき

たに違いないし、また人間生活を導いていくための多くの定評ある規則や格言が、一般的な合意によって定められ、承認されてきたに違いない。ものを書くことが広く行われるようになるにつれ、賢人たち、あるいは自分が賢人だと思ふ人びとは、当然に、世に行われ、尊重されている格言の数を増やしたり、適切または不適切な行動についての自分の意見を表明したりしようと努めただろう。そのさい、ある時はイソップ物語と呼ばれているもののように、寓話といういくらか手の込んだ形で、またあるときはソロモンの金言、テオグニス (Theognis) やフォキュリデス (Phocylides) の詩句、ヘシオドス (Hesiod) の著作の一部のような、警句または名言というもっと簡明な形がとられた (WN, Vol. II, p. 768, 『国富論』四, 29-30ページ)。

こうした形のものから、やがて組織的順序での配列を構想し、自然的原因、一般的原理からすべてを引き出すように試みられるようになる。

少数の共通原理で結び合わされた様々な観察の、体系的な配列の美しさは、自然哲学の体系を目指した古代の粗野な諸論文に初めてあらわれた。同種のことは後に道徳においても企てられた。日常生活の格言は、自然現象を配列し結びつけようと試みたのと同じ仕方である。ある組織だった順序で配列され、少数の共通原理で結び合わされた。そうした結合原理を探究し説明すると自任する学問が、道徳哲学と呼ばれてしかるべきものなのである (WN, Vol. II, p. 769, 『国富論』四, 30ページ)。

ここで語られているのと同じ結合原理に関する思想は「天文学史」にもあった。では論理学はいかにして登場したのか。様々な自然哲学と道徳哲学の体系が登場したために、体系を評価するための「推論の良否についての一般原理の科学」が必要になったからである、とスミスは述べている。

論理学の起源

さまざまな著者が「自然哲学と道徳哲学」の様々な体系を説いた。しかし彼らの議論は、論証であるどころか、きわめてわずかな「蓋然性」しかないことが多く、ときには「詭弁」にすぎなかった。「瞑想の諸体系」は、世界のいつの時代にも、些細な金銭上の事柄において、余りにもくだらぬ理由で採用されてきた。「哲学や瞑想の問題」については「途方もない詭弁」がしばしば最大の影響を与えてきた。

自然哲学と道徳哲学のそれぞれの体系の擁護者たちは、当然、自分たちの体系とは反対の体系を支えるために援用される議論の弱点を、暴露しようと努めた。そうした議論を検討するさいに、彼らは必然的に、蓋然的な議論と論証的な議論、誤った議論と決定的な議論との

相違を考えるようになった。そして論理学，すなわち推論の良否についての一般原理の科学が，この種の吟味が生み出した考察から必然的に生じてきた。その起源においては，物理学にも倫理学にも遅れたとはいえ，論理学は古代の哲学の学校の，確かにすべてではなかったが大部分で，それらの科学のどちらよりも先に，教えられるのが通例であった（*WN*, Vol. II, pp. 769-70, 『国富論』四，31-2ページ）。

近代の哲学

こうして成立した自然哲学，道徳哲学，論理学という古代の学問の三部門区分が，その後のヨーロッパの近代の哲学では五部門区分となったとスミスは言う。

論理学が最初に教えられ，存在論が二番目にきた。人間の魂および神の，本性に関する学説を扱う霊学が三番目にきた。四番目に道徳哲学の墮落した体系が続き，これは霊学の諸学説，人間の魂の不滅，神の正義から来世において期待されるべき賞罰と，直接結びついたものと考えられていた。物理学の簡単で表面的な体系が，通常，この課程の結びとなっていた（*WN*, Vol. II, p. 772, 『国富論』四，35ページ）。

スコラ学批判

近代の哲学というのはスコラ学（以降）を指している。古代の道徳哲学をスミスは評価し，スコラ学を墮落した学問として厳しく批判している。

たんに個人としてだけではなく，家族，国家，大きな人類社会の一員として考えた場合に，人間の幸福と完成とは何かということが，古代の道徳哲学が研究しようとした対象であった。その哲学では，人間生活についての様々な義務は，人間生活の幸福と完成の手段として扱われた。・・・古代の哲学では，徳の完成は徳の所有者に対して，現世における最も完全な幸福を必然的にもたらすものとして表現された。ところが，自然哲学だけでなく道徳哲学も神学の単なる手段として教えられるようになると，人間生活の諸義務は，主として来世の幸福の手段として扱われた。・・・近代の哲学では，それは一般に，あるいはむしろほとんど常に，この世のどの程度の幸福とも両立しないものと，しばしば言われ，天国は人間の自由で寛大な，生氣ある行動によってではなく，懺悔と禁欲，修道僧の耐乏と卑下によってのみ獲得されるべきものであった。決議論と禁欲道徳論が，たいていの場合，スコラ哲学者たちの道徳哲学の大部分を作り上げていた。哲学の様々な部門のすべてのなかで，際立って重要な部門が，このようにして際立って墮落した部門となったのである（*WN*, Vol. II, p. 771, 『国富論』四，34ページ）。

「古代の道徳哲学」も多様で，たわいないものもあったが，基本的にその目的は「人間の幸福

と完成」に置かれていた。「徳」は「現世の幸福」をもたらすものであった。それに対してスコラ哲学は「懺悔と禁欲」を内実とした。この変更は聖職者教育を意図したもので、細かな議論や詭弁が増えたスコラの「決議論と禁欲道徳論」は「郷土や世間の人 (gentlemen or men of the world)」の教育には適しなかったし、「理解力の改良」や「心の矯正」に役立たなかった。しかし、この「墮落した学問」は今も続いているとスミスは指摘する。スミスは大学の現状にきわめて批判的である。

哲学のこの課程は、ヨーロッパの大学の大部分で今なお引き続き教えられており、どの程度精を出して教えられているかは、それぞれの個々の大学の制度が、教師にとってどの程度精励を必要なものとしているかによる。最も豊かで、最も寄付財産の多い大学では、指導教師が、この墮落した課程の脈絡もないわずかばかりの細切れを教えることに甘んじており、しかもこうしたものでさえ、彼らはきわめて不熱心に、表面的に教えているのが普通である (WN, Vol. II, p. 772, 『国富論』四, 35-6ページ)。

「近代の哲学」(中世のスコラ哲学から以降の哲学)も改良されてきたが、その大半は大学で行われたのではない。改善を積極的に採用しようとはせず、「学者社会のいくつかは、打破された体系や時代おくれの偏見が、世界の他のあらゆる隅々から追い出されてしまった後にも、長い間、それらが防壁と保護を与えられる聖域として残ることを選んだ」(WN, Vol. II, p. 772, 『国富論』四, 36ページ)。

一般的に言って、最も富裕で最も寄付財産の多い大学は、そうした改良を採用するのに最も緩慢で、既定の教育計画の多少とも大幅な変更を容認することを最も嫌がった。そうした改良は比較的貧困な大学のなかのあるものに、より容易に導入された。そこでは教師は、自分たちの生計の大半について自分たちの名声に依存しているために、世間で現に行われている見解により多くの注意を払わないわけにはいかなかったのである (WN, Vol. II, pp. 772-3, 『国富論』四, 36ページ)。

グランド・ツアー批判

教会人の教育だけを意図し、しかも不熱心な教育しかなかったヨーロッパの公立学校と大学は、次第に郷土や財産家など、ほとんどすべての人の教育を引き受けるようになった。けれども、教えられている大部分は世間の実務につくのに必要な適切な準備とは思われない。では今流行の外国旅行、グランド・ツアーはどうか。その効能についてスミスはシニカルであった。

イングランドでは、若者が学校を出ると、どの大学にも送らずに、外国旅行に行かせることが、日ごとに有力な習慣になっている。我が若者たちは一般に、その旅行によって大いに

改良されて帰国すると言われている。・・・彼は一般に一つか二つの外国語についてある程度の知識を身につけはするが・・・正しく話したり書いたりできるほどのものであることは、めったにない。その他の点では・・・自惚れが強くなり、放埒で放蕩になり、研究にも業務にも真面目に打ち込めなくなって帰国するのが普通である。・・・両親や親類の監督も規制もできない遠方で、人生の最も貴重な歳月を、最もくだらない放蕩に費やし、それ以前の教育で身につけていたかもしれない有用な習慣は、身につく固まるどころか、ほとんど必然的に、すべて弱められるか失われる。人生のこの早い時期に旅行するとうようなきわめて馬鹿げた慣行が、好評を博しえたのは、大学が悪評に身を委ねたためにほかならない（*WN*, Vol. II, pp. 773-4, 『国富論』四, 37-8ページ）。

バックルー公のグランド・ツアーの付き添い教師を引き受けたスミスの個人的体験はどうだったかという疑問もある。

スミスは大学の現状を厳しく批判しているのであるが、こうした批判が大学の改革につながることを期待していたかもしれない。改良に積極的な「比較的貧困な大学」が人材育成で大きな影響力を持っていたわけではないから、スミスとしてはオックスフォードやケンブリッジのような大きな大学の変革が望ましいと思っていたであろう。しかし、競争原理の導入が処方箋である限り展望はなかった。もとより、学問は大学の専売特許ではない。スミスは自身の生きた時代に全体として学問は発展してきたと理解しており、それも大学の外部での貢献が大きいと見ていた。ベーコン主義的学問はイングランドでは王立協会などの組織や、ロンドンなどの在野の各種サークルで推進された。バーミンガムにはウェッジウッドやプリーストリが集ったルナー協会があった。

次にスミスは他の時代、他の国民の教育へと議論を進め、まず古代ギリシアの体育と音楽、古代ローマの体育について考察している。

古代ギリシアとローマの体育と音楽

古代ギリシア共和国では、自由市民は公共の役人の指揮のもと、体育と音楽の教育を受けた。体育の意図は「身体を鍛え、勇気を高め、戦争の疲労と危険に備える」（*WN*, Vol. II, p. 774, 『国富論』四, 38ページ）ことであった。ギリシアの民兵は世界に存在した最良の民兵の一つであったから、この公教育部門は所期の目的に完全に適っていた。音楽教育の意図は、哲学者や歴史家によると、「精神を人間らしくし、気質を和らげ」、公私にわたりすべての「社会的道徳的な義務を遂行」（同）しようという気持ちをもたせることであった。

古代ローマのマルスの野原での訓練は、古代ギリシアのギムナジウムでの訓練と同じ目的のもので、その目的を果たした。ローマ人の公共道徳はギリシア人のそれに勝っていた。ポリュビオス、ディオニュシオス・ハリカルナッスス（Dionysius of Halicarnassus）の証言や、ギリシア史、ローマ史に証拠がある。

争い合う諸党派が平静で節度を保つということは、自由民の公共徳のなかで最も基本的な事情だと思われる。しかし、ギリシア人の諸党派は、ほとんど常に乱暴で血腥かったのに対し、ローマ人のどの党派も、グラックスたちの時代まではまったく血を流したためしがない(WN, Vol. II, p. 775, 『国富論』四, 39ページ)。

したがって、プラトン、アリストテレス、ポリュビオス、モンテスキューの権威がそう主張しているにもかかわらず、ギリシア人の音楽教育は彼らの道徳にあまり効果がなかったとして、いわゆるカタルシス効果をスミスは否定している。両者を比較して、暴力的な党派争いを克服したローマ人の道徳のほうが優れていたとスミスは断言するのであるが、その理由をストア哲学ではなくローマの裁判制度に求めている。

ギリシア・ローマの自由な教育

音楽と軍事訓練は、アテナイでもローマでも国家の経費ではなく、自由市民が自己負担で行った。市民は、他の教育部門、読み書き、算術も、家庭教師か有料の学校で習得した。洗練が進んで「哲学や修辞学」が流行すると、上流階級は子供を哲学者や修辞学者の学校に送った。学校に公的援助はなされなかったし、需要は少なかったので、エレアのゼノン(Zeno of Elea)、プロタゴラス(Protagoras)、ゴルギアス(Gorgias)、ヒピアス(Hippias)などの教師は移動して生活した。需要が増すにつれて、学校はまずアテナイに、またいくつかの都市に定着した。プラトンはアカデメイア、アリストテレスはリュケイオン(Lyceum)、ストア学派の創始者のゼノンはポルティコ(Portico)が国家によって割り当てられた。エピクロスは自分の庭園を学校に遺贈した。収入は謝礼か授業料であった。卒業の特権も資格付与もなかった。教師が学生を管理することもなく、「徳と才能」が与える「自然的権威」以外に教師に権威はなかった(WN, Vol. II, pp. 777-8, 『国富論』四, 41-3ページ)。

ローマでは民法(ローマ法)の学習は特定の家族(パトリキウス)の教育になっていたが、一般の若者は法律を理解する集まりで学ぶしかなかった。ギリシアでは法律が学問にはなっていなかった。諸共和国、特にアテナイでは、裁判所が「無秩序な人間集団」からなり、喧噪、党派、派閥に左右されて恣意的な判決を行った。ローマでは主要な裁判所は「一人または少数の裁判官」で構成され、審理は公開され、裁判官は先例を参照した。慣例と先例への配慮が、ローマ法を「秩序整然たる体系」に形成した。ローマ人の品性がギリシア人に勝るのは裁判所組織が勝ることによる。ローマ人は「精励で事情に通じた裁判所」で慎重に宣誓を行った(WN, Vol. II, pp. 778-9, 『国富論』四, 44-5ページ)。

こうした相違があったが、ギリシア人もローマ人も「市民のおよび軍事的能力」では近代国民の能力に少なくとも匹敵した。軍事訓練の練習場、公共の広場は国家が配慮したが、市民は自分で教師を見つけて訓練を受けたし、上流階級は人文学や科学を教師に教わった。教育の需要があったので、才能ある教育者が生まれた。無制約の競争があったので教師の才能をきわめ

て高度の完成に導いたように思われる。

近代の学校や学寮の寄付財産は、教師を「専門職での成功や名声から多かれ少なかれ切り離す」ものであり、彼らの精励を損なう。「彼らの俸給はまた、彼らと競争しようとする教師を、かなりの奨励金をもらって商売をしている商人に対して奨励金なしで競争しようとする商人と同じ状態に置く」（*WN*, Vol. II, p. 780, 『国富論』四, 47ページ）。しかも卒業による特権は公的教師の講義に出席することによってしか得られない。したがって、優れた私的教師を得ることも不可能となっている。このようにスミスは重商主義政策と同一の一部階級への特権、独占の付与と同じ差別構造を教育にも見出している。しかも（オックスフォードのような）公的教育施設では需要のない、時代遅れの、あるいは詭弁からなる学説体系や学問分野が生き延びている。

もし公的教育施設がなければ、時代の状況が与えるだろう最も完全な教育課程を勤勉と能力をもってやりおえた郷土が、世に出たとき、郷土や世に知られた人たちのあいだで交わされる会話の共通の話題のどれについてもまったく無知だということは、ありえないだろう（*WN*, Vol. II, p. 781, 『国富論』四, 48ページ）。

スミスはここまで主張している。他方、女性教育のための公共施設は何もないが、両親や保護者が学ぶ必要があるとか学べば役にたつとか判断したものを教えられており、便宜や利益を受けている³³⁾が、男性が自分の受けた教育から便宜や利益を引き出すことはめったにない、とまで言うのである（*WN*, Vol. II, p. 781, 『国富論』四, 48-49ページ）。これはレトリック過剰だろうか。

6 必要な公的国民教育

こうしてスミスは公共が配慮すべき国民教育として何があるかと議論を進め、周知のように文明化と分業によって勤労大衆が受ける弊害を除去する教育論を展開する。

分業が進むにつれて、労働によって生活する人びとの圧倒的部分すなわち国民の大部分の仕事が、少数の、しばしば一つか二つの、きわめて単純な作業に限定されるようになる。ところが大半の人びとの理解力は、必然的に、彼らの普通の仕事によって形成される。一生を少数の単純な作業の遂行に費やし、その作業の結果もまたおそらくつねに同一あるいはほとんど同一であるような人は、困難を除去するための方策を見つけ出すのに自分の理解力を働かせたり、創意を働かせたりする必要がない。・・・そのため彼は自然に、そのような努力の習慣を失い、一般に、およそ人間としてなりうるかぎり愚かで無知になる（*WN*, Vol. II, pp. 781-2, 『国富論』四, 49-50ページ）。

労働者は「精神の活発さ」を失い、「理性的な会話」に参加して楽しむこともできなくなるし、「寛大、高貴、優しさ」といった感情も持てなくなり、「私生活の普通の義務」についても正当な判断ができなくなる。自国の重大で広範な利害関係も判断できないし、特別の骨折りにしには、戦争で自国を防衛することもできない。彼の単調な生活が「精神の勇気を腐敗」させ、「兵士の不規則で不安定で冒険的な生活」を嫌悪させるし、身体の活力もまた腐敗させ、他の一切の仕事に取り組みなくさせる。彼の「特定の職業での腕前」は彼の「知的、社会的、軍事的な徳」を犠牲にして獲得されるのである。政府がその防止に骨を折らねば、これが「改良され文明化したすべての社会」で、「国民の大部分」である「労働貧民」が陥る状態である（*WN*, Vol. II, p. 782, 『国富論』四, 50ページ）。

これは深刻な問題である。野蛮な社会、狩猟民や遊牧民の社会では事情がことなるし、「製造業の改良と対外商業の拡大に先立つ農耕の粗野な状態での農耕民の社会」でも事情は違う。

そのような社会では、各人の多様な仕事によって、各人は絶えず起こる困難を除去するために、自分の能力を発揮する方法を考案せざるを得なくなる。創意は活発に維持され、精神は、文明社会ではほとんどすべての下層階級の人びとの理解力を麻痺させるように思われる眠そうなる愚昧に陥るのを抑えられる。・・・野蛮社会では・・・だれもが戦士である。まただれもがある程度政治家でもあり、社会の利害や社会を統治する人びとの行動について、一応の判断を下すことができる（*WN*, Vol. II, p. 783, 『国富論』四, 51ページ）。

野蛮な社会にはそれなりの利点があるという理解である。文明社会の少数者がもつような「改善され洗練された理解力」はだれにもない。しかし、粗野な社会では各人の仕事は多様だが、社会全体の仕事は文明社会ほど多様ではなく、各人は多様な仕事をするのに必要な程度の「知識や器用さや創意」をもっている。

文明社会の功罪

文明状態では社会全体の職業は限りなく多様であるので、他人の職業を検討する「余暇と意向」をもつ人びとの観察対象となり、「彼らの精神に無限の比較や結合を行わせ、彼らの理解力を並外れた程度に鋭く包括的なものにする」が、「国民大衆」の場合、「人間の性格のうちの高貴な部分」はすべて大幅に消滅してしまう。したがって、「一般民衆の教育は・・・文明化した商業社会では、ある程度の身分や財産のある人びとの教育よりも、公共の配慮を必要とするであろう」（*WN*, Vol. II, p. 784, 『国富論』四, 52ページ）。

18か19歳になって専門職などに就く、ある程度の身分や財産のある人びとは、公共的尊敬を得るための教養を身につける時間的余裕もあれば、両親や保護者もその費用を出す。適切な教育ができないとしても、それは教師が「怠惰で無能」であるか、現状ではすぐれた教師を見つけるのが困難なためである。しかし、専門職は暇に恵まれるから、必要な知識をやがて獲得し、

自分を完成させることができる。

一般民衆の場合はそうではない。彼らには「教育のための時間」がほとんどない。両親は幼時でさえ彼らをほとんど扶養できない。彼らは働けるようになるや自活できる商売を身につけねばならない。商売は単純に一様なものなので、理解力を働かす余地がないし、労働は継続的で厳しいから、他のことに精出すことなどない。

にもかかわらず、「どの文明社会でも、一般民衆は・・・読み、書き、計算という、教育の最も基礎的な部分は、生涯のきわめてはやい時期に身につけることができる」が、それは職業に就く前に、読み、書き、計算を取得する時間があるからである。「公共はきわめてわずかな経費で、国民のほとんどすべてにたいして、教育のそれらもっとも基本的な部分を取得する必要を助長し、奨励し、さらには義務づけることさえできる」として、スミスはスコットランドの教区学校とイングランドの慈善学校を例示している。後者はあまり普及していないが、なまかじりのラテン語の代わりに幾何学と力学の初歩を教えるようにとスミスは提言している。また初等教育の試験か検定を国民に義務づけることもできるとスミスは言う（*WN*, Vol. II, pp. 784-6, 『国富論』四, 55-7ページ）。

続いてスミスは軍事訓練と民兵について論じているが、これはよく知られているので割愛しよう³⁴⁾。スミスは最後に、下層階級の教育から国家は少なからぬ利益を得るとして次のように述べている。

彼ら（下層階級）は教化されればされるほど、無知な諸国民のあいだでしばしば最も恐るべき無秩序を引き起こす熱狂や迷信の惑わしにかかることが、それだけ少なくなる。そればかりでなく、教化された知的な人びとは、無知で愚鈍な人びとよりも、つねに礼儀があり、秩序正しい。彼らは個人個人がより尊敬されていると感じていて、法的な目上の人びとの尊重を受けやすく、したがってまた目上の人びとを尊重する気持ちもより大きいし、そのため、政府の方策にたいして気ままな、あるいは不必要な反対をするように誘導される傾向も少ない。自由な国々では、政府の安泰は、国民が政府の行動にたいしてくださる好意的な判断に依存するところがきわめて大きいから、それについて彼らが性急に、あるいは気まぐれに判断する気にならないようにすることは、たしかに最高に重要であるに違いない（*WN*, Vol. II, p. 788, 『国富論』四, 60ページ）。

これが第二項「青少年教育のための施設の経費について」の最後の文章である。スミスは次に、第三項「あらゆる年齢の人びとの教化のための施設の経費について」において、一般人のための教育施設としての教会と宗教教育について詳細な議論を繰り広げている。スミスは以下のように述べて、スコットランド教会とスイスのプロテスタント教会を支持している。

キリスト教世界で最も富裕な教会でも、このきわめて貧しい寄付財産しかないスコットラン

ド教会以上に、国民大衆のあいだで、信仰の統一性、献身の熱意、秩序の精神、規律正しさ、厳格な道徳を維持してはいない。スコットランド教会は、国教会が生み出すと考える聖俗両面のすべてのりっぱな効果を、他のどの教会にも劣らず完全に生み出している。スイスのプロテスタント教会の大半は、一般に、スコットランド教会よりも寄付財産が多くはないが、それらの効果をさらに高度に生み出している（WN, Vol. II, p. 813, 『国富論』四, 111ページ）。

この点は明確だが、『国富論』がなぜここまで踏み込んでキリスト教会の制度と教義を論じているのかを理解するためには、この項目を分析する必要がある。18世紀の大ブリテンは「国家教会制」であった。そこでは経済を原理とする文明社会が成長していたが、その上にいわば上部構造として国家と教会が君臨していた。スミスは経済の自由競争を擁護し、商人・製造業者の一部の者に特権を与える国家の重商主義政策を根源的に批判した³⁵⁾。そのスミスはローマ教会の精神界への専制的な君臨を当然、批判したであろう。スミスは大学の競争と同じく、宗教の自由競争を支持したであろう。そうとすれば国教会制度は当然批判の対象になるであろう。スコットランドでは長老派教会が事実上、国教会であった。スミスは非国教徒解放を当然、支持したのではないだろうか。

スミスは労働者の人格的隷従を批判した。したがって、18世紀に文明世界の周辺で拡大した奴隷制も当然、スミスは退けた。1750年代に議論になったユダヤ人解放については、管見の限りで、スミスの言及はない。スミスはもとよりすべてについて論究しているわけではないだろう。そのようなことはスミスといえども不可能であっただろう。

本稿は、包括的な主題を掲げたために、すでに相当広範囲にわたっており、いささか複雑な議論になっているかもしれない。ここでこのキリスト教会の問題まで分析する余裕はないので、この問題は改めて取り上げることにしたい。

おわりに

本稿は、アダム・スミスの学問論を初期著作から『国富論』まで跡づけてきた。『修辞学・文学講義』の文体論・作文・歴史論と『国富論』の宗教教育・教会論を割愛したから、網羅的な検討ではない。『道徳感情論』の分析も不十分である。しかし、おおよそのところ学問・教育についてスミスがいかに徹底した自由競争を重視していたかは、ほぼ明確になっただろうし、国家などの基金による保護や特権によって守られるよりも、実力によって名声と卓越を目指す教師の精励が研究教育の質を担保するという観点から、スミスが大学を含む教育施設を一貫して評価し、また批判したことが浮かび上がったであろう。

スミスによれば、大きな基金や俸給に支えられることは教師の墮落を招き、大学の沈滞を帰結する。むしろ基金の少ない貧しい大学のほうが、教師は努力するから成果を上げるというの

であった。この考察を現代の大学に直接に当てはめうるとはもとより言うつもりはない。そもそも現代では理系の先端的な研究開発は莫大な資金がなくては存立できない分野が多い。人文社会科学の場合も、本格的なフィールド・ワークをするには相当の研究費が必要であるし、文献研究であっても、十分な文献を参照するにはやはり研究費が不可欠であるから、勤労と精励さえあれば十分に良い学問を達成できるとは言えないであろう。その意味では公的資金、公共の支援、民間の支援が必要であることは否定できない。

しかし、原理的に、自由競争でなければよい学問が生まれえないというのは現代でも正しい見解ではないだろうか。地位に安住し怠惰を決め込むことは、学問ならずとも、どのような職業でも墮落であり、よい成果をもたらすことはないであろう。国家による学問教育の統制が旧ソ連と東ヨーロッパ諸国の学問を崩壊させたことも記憶に新しい。我々はスミス自身の飽くことなき学問的精励を教訓とできるであろう。

注

- 1) Hiroshi Mizuta, *Adam Smith's Library*, Oxford U.P., 2000. スミスの蔵書の一部が東京大学に所蔵されていることは、今ではよく知られているであろう。
- 2) David Fate Norton and Mary J. Norton eds., *The David Hume Library*, Edinburgh Bibliographical Society in Association with the National Library of Scotland, 1996.
- 3) Nicholas Phillipson, *Adam Smith: An Enlightend Life*, Penguin Books, 2011, p. 60. 永井大輔訳『アダム・スミスとその時代』白水社, 2014年, 90ページ。
- 4) P.J.M. Wilem ed., *Bibliotheca Fletcheriana*, private edition, 1999. ウィレムは数少ないミラー研究者。ちなみにニュートンの蔵書は1700点余り。John Harrison, *The Library of Isaac Newton*, Cambridge, 1978, p. 59,76. 歴史家ギボンの蔵書は1900点余りで、3200冊を超えている。Geoffrey Keynes, *The Library of Edward Gibbon*, 2nd ed. St Paul's Bibliographies, 1980, p.20.
- 5) ヒュームの学問論は論説「技芸と学問の興隆と進歩について」に明快に説かれているが、これについての筆者の見解は『文明社会と公共精神』の第1章「ヒュームの文明社会史論の相型」を参照されたい(初出は『経済論叢』第123巻第1・2号, 1979年1・2月)。ミラーの学問論については、筆者の「法と統治の科学の進歩——ジョン・ミラーの経済思想(5)」、『経済論叢』第170巻第4号, 2002年10月がある。D・ステュアートの学問論については、篠原久「啓蒙の『形而上学』と経済学の形成——ドゥーガルド・ステュアートと『精神の耕作』」, 田中秀夫編著『啓蒙のエピステーメーと経済学の生誕』京都大学学術出版会, 2008年, 所収を参照のこと。
- 6) Roger L. Emerson, *Academic Patronage in the Scottish Enlightenment*, Edinburgh University Press, 2008.
- 7) 邦訳は前田俊文訳, 京都大学学術出版会, 2015年。
- 8) 1740年から46年までのスミスのオックスフォード時代については、フィリップソンによって研究が深められた。彼のスミス研究のメリットの一つである。Nicholas Phillipson, *Adam Smith, op.cit.*, chap. 2. 永井大輔訳, 前掲書, 第2章。
- 9) デスニツキーとトレチャコフで、二人はスミスから倫理学と法学、ミラーから市民法(ローマ法)を学び、彼らを通じて『国富論』の10年前に「法と統治のスミスの理論」はロシアの宮廷社会に影響を及ぼしていたという。Phillipson, *op.cit.*, pp. 166-9. 邦訳, 前掲, 218-23ページ。
- 10) Phillipson, *ibid.*, p.170. 邦訳, 前掲, 224ページ。
- 11) 田中秀夫『アメリカ啓蒙の群像』名古屋大学出版会, 2011年, 第1部を参照。
- 12) J.A.Shumpeter, *History of Economic Analysis*, London & New York, 1954, p. 184. 東畑精一・福岡正夫訳, シュンペーター『経済分析の歴史』岩波書店, 2005年, 上, 329ページ。もっともシュンペーターは「天文学史」を珠玉の論考と見なした。*Ibid.*, p.182, 同, 327ページ。
- 13) Ian Simpson Ross, *The Life of Adam Smith*, Oxford: Clarendon Press, 1995. I.S. ロス, 篠原・只腰・松原訳『アダム・スミス伝』シュプリンガー, 2000年, 109ページ。

- 14) 学生の講義ノートから編集されたアダム・スミスの『修辭学・文学講義』は、まさに文学・人文学を範囲とする学問論を含むものであるが、これに立ち入るには紙幅を要するので本稿では割愛する。筆者の関連する分析については『原典探訪 アダム・スミスの足跡』（法律文化社、2002年）の第9章の3「修辭学・文学講義の概要」143ページ以下にあるが、十分な検討ではない。
- 15) Phillipson, *op.cit.*, p. 89. 邦訳、前掲書、127ページ。
- 16) Adam Smith, *Essays on Philosophical Subjects*, Oxford: Clarendon Press, 1980. 水田洋ほか訳『哲学論文集』名古屋大学出版会、1993年、水田洋氏の解説を見よ。348-9ページ。以下、本書からの引用は、原書（*Essays*と略記）と邦訳ページを併記する。なお、以下のスミスからの引用にあたっては、本稿の文体の整合性から表現に手を加えた場合がある。
- 17) 内田義彦『経済学の生誕』未来社、1953年。
- 18) スミスの蔵書にマキアヴェッリはあるが、エラスムスはない。
- 19) 1976年以後にスミスの新著作集（Glasgow Edition）が出て、1980年に刊行された『哲学論文集』に注目が集まった1980年代から90年代にかけて、わが国でも「天文学史」研究が盛んに行われた。その代表的成果は、只腰親和『天文学史とアダム・スミスの道徳哲学』多賀出版、1995年である。現代の詳しい天文学史としては、山本義隆『世界の見方の転換』1～3、みすず書房、2014年がある。
- 20) 残された数少ない文章のなかの「ヘロドトス宛の手紙」においてエピクロスは自然研究を「恐怖」を鎮め、「精神の平静」に到達するものとして論じており、感情との関係で天体観測を理解する視点はすでにあるとも言える。出隆・岩崎充胤訳『エピクロス——教説と手紙』岩波文庫、1959年、38-9ページ。
- 21) 観念連合の思想に関してはスミスがヒュームの影響を受けていることは明らかであろう。
- 22) スミスはギリシア語もラテン語も堪能であったが、プラトンの英訳は1759年に *Phaedo* 『パイドン』（魂の不死について）、1763年に *Republic* 『国家』が出ただけである。*Essays*, introduction, p. 26.
- 23) ソクラテス以前のイオニア学派などのスミスの低い評価は、アリストテレスに災いされている、とクラークの研究（M. L. Clarke, *Greek Studies in England 1700-1830*, Cambridge University Press, 1945）を踏まえて『哲学論文集』の編者は指摘している。*Essays*, introduction, p. 26.
- 24) I. S. Ross, *op.cit.*, 邦訳、前掲、112ページ。
- 25) Thomas Kuhn, *The Structure of Scientific Revolutions*, University of Chicago Press, 1962. 中山茂訳『科学革命の構造』みすず書房、1971年
- 26) ブライアン・グリーン、林一・林大訳『エレガントな宇宙』草思社、2001年。
- 27) 筆者の『文明社会と公共精神』昭和堂、1996年、「第1章 ヒュームの文明社会史論の相型」、12ページ以降を参照。
- 28) 『道徳感情論』からの引用は水田洋訳『道徳感情論』岩波文庫、下、2003年から行う。原書の表示は *TMS* と略記する。テキストは Adam Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, Oxford: Clarendon Press, 1776.
- 29) Stephen Greenblatt, *The Swerve: How the World became Modern*, New York, 2011. スティーヴン・グリーンブラット、河野純治訳『1417年、その1冊がすべてを変えた』（柏書房、2012年）は、ルネサンスにおけるルクレティウスの『物の本質について』の発見物語である。
- 30) セネカ、兼利 琢也訳『怒りについて』岩波文庫、2008年。
- 31) 結論としてスミスは「教育と宗教的教化の施設の経費」は「社会全体の一般的抛出」と受益者負担とで賄われるのが適切で利益があるとしている。*WN*, Vol. II. pp. 815-6, 四、115-6ページ（テキストについては次の注を参照）。
- 32) 『国富論』からの以下の引用は水田洋監訳・杉山忠平訳『国富論』四、岩波文庫、2001年から行う。原書は *WN* と略記する。テキストは Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, Vol. II, Oxford: Clarendon Press, 1976.
- 33) スミスには進んだ女子教育が必要だという思想は見出せない。良妻賢母思想がハチスン、スミス、ミラーの女性論であったように思われる。ミラーは女性解放の行き過ぎという指摘もしていた。筆者の『啓蒙と改革——ジョン・ミラー研究』1999年、名古屋大学出版会、64-5ページを参照されたい。
- 34) この主題についての筆者の見解については「スミスにおける常備軍と民兵」、『文明社会と公共精神——スコットランド啓蒙の地層』昭和堂、1996年、第4章を参照されたい。
- 35) この主題についての筆者の見解は「帝国の夢を弾劾する——アダム・スミスの商業ヒューマニズムと共和主義」、『思想』第972号、2005年5月（後に「アダム・スミスにおける共和主義と経済学」と題し、修正のうえ『スコットランド啓蒙とは何か』ミネルヴァ書房、2014年に収録）を参照されたい。